The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Marginalized Imperialist: The Global Life of Swiss Diplomat Paul Ritter (1865-1921)
Author(s)	Studer, Raphael Albert Robert
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/98702
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（Studer Raphael Albert Robert）	
論文題名	Marginalized Imperialist: The Global Life of Swiss Diplomat Paul Ritter (1865-1921) （スイス外交官ポール・リッターのグローバルライフ）

In my PhD thesis “Marginalized Imperialist: The Global Life of Swiss Diplomat Paul Ritter (1865-1921)” I dissected the life of Paul Ritter who served as the first professional Swiss diplomat to Japan between 1892 and 1909 by applying the theoretical approaches of global microhistory, cultural history of diplomacy, (Swiss) postcolonialism, and transimperial history. My study, based on a large number of private and official primary sources, has characterized Ritter as a paradoxical “marginalized imperialist”: On one hand, an unequal Swiss-Japanese treaty allowed him to execute jurisdiction over his compatriots on Japanese soil. Moreover, thanks to his bourgeois habitus the Swiss diplomat was able to seamlessly integrate into the Yokohama foreign settlement and consequently shared the anti-Japanese view prevailing among the Western residents. He also possessed very limited Japanese language skills and was barely interested in local culture despite pretending to be an Asia expert back home. On the other hand, precisely his pronounced dislike for ceremony coupled with his low official rank led to Ritter becoming heavily marginalized by Japanese officials and other Western diplomats alike. As a matter of fact, the Japanese government bluntly refused to acknowledge his diplomatic status for the longer part of his tenure in East Asia. Only his close affiliation with German officials both in Japan and in neighboring countries enabled the Swiss diplomat to survive in this challenging environment.

Despite the idiosyncrasies of Paul Ritter’s global life, the PhD thesis has brought to light several larger historical phenomena which had been previously ignored. First, the extraordinary situation in Japan where the Swiss envoy had the authority to exercise jurisdiction over his countrymen has added a new layer to our understanding of Switzerland’s widely practiced “colonialism without colonies.” Instead of delegating the protection of its nationals to other Western powers as it usually did Switzerland – via its official agent Ritter – here resorted to the instrument of direct imperialism. Nevertheless, the agency of the Swiss diplomat in Yokohama was severely curtailed due to some specific characteristics of Switzerland’s “marginal imperialism.” Second, my study has revealed the existence of a tight-knit transimperial network uniting male bourgeois German speakers in all the major 19th century Asian port cities where Germanophones (overwhelmingly Germans and German-speaking Swiss) established their own linguistically, socially, and racially exclusive gentlemen’s clubs. Since membership of one club generally guaranteed a member’s acceptance at another, these

institutions served as an instrument to conduct trade and gather commerce-related information across imperial boundaries. Third, the PhD thesis has contributed to a better understanding of a topic largely absent from current literature on foreigners in Meiji Japan, namely the ubiquitous, openly expressed prejudice harbored by the Euro-American residents against the Japanese and other Asians. Previous scholarship had argued in particular that Swiss residents in Japan distinguished themselves from other Westerners through their fair and unbiased attitude towards the locals. However, the example of the heavily anti-Japanese Ritter demonstrates that it is problematic to a priori absolve the Swiss community in Japan from any charges of racism on the grounds of their supposedly innate respect for diversity and democratic values.

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（Studer Raphael Albert Robert）	
論文審査担当者	（職）　　氏　名 主 査　大阪大学　教授　　藤川　隆男 副 査　大阪大学　教授　　Gerold Krozewski 副 査　大阪大学　准教授　　中谷　惣

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： Marginalized Imperialist: The Global Life of Swiss Diplomat Paul Ritter(1865-1921)

学位申請者　　Studer Raphael Albert Robert

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　藤川　隆男

副査　大阪大学教授　Gerold Krozewski

副査　大阪大学准教授　中谷　惣

【論文内容の要旨】

本論文は、スイスから日本に赴任した最初の専門職の外交官（1892―1909）、ポール・リッターの伝記的研究であると同時に、リッターを「マージナルな帝国主義者」と位置付けることで、西洋列強の一員であると同時に、小さな共和国にすぎないスイスと日本の関係に、彼を通して多面的に光を当てた研究でもある。論文は、英語で書かれており、序章と結論及び 7 章で構成される本文は 187 頁（画像などの挿入を含む）に達する。

序章では、本論文が単なる伝記的研究ではなく、複数のテーマを追求する分析的研究であることが示されている。申請者は、4 つの理論的アプローチ、すなわち「グローバルな生涯」、外交の文化史、スイス的ポストコロニアリズム、間-帝国史のアプローチを採用したと述べる。申請者によれば、「グローバルな生涯」とは、ミクロストリアの方法をグローバルに活躍する人物に適用し、それをグローバルなプロセスに位置づけることである。外交の文化史とは、文化を意味の構造として理解し、その解明を目指す手法であり、ソシアビリテやアイデンティティなどが重要になる。スイス的ポストコロニアリズムに関しては、スイスの「植民地を持たない植民地主義」とその現在につながる影響に近年関心が向く状況にあって、その実例を不平等条約下の日本で検証することが本論文のテーマの一つとされる。最後の間-帝国史のアプローチは、帝国の境界を越えた関係の研究であり、本論文が解明したドイツ人ブルジョワのネットワークは、最も重要な発見の一つだとされる。史料としては、リッター家が保管してきた手紙や文書及び他の多数の未刊行の資料や外交文書や公文書、新聞などが広く使われている。

本論の構成は次のようになっている。第 1 章では、リッター家の家業とバーゼルの町の歴史が、リッターの出自と彼の急進的政治運動への関わりとともに扱われる。第 2 章では、スイスの「植民地を持たない植民地主義」の特質が明らかにされる。第 3 章では、ドイツ語圏の男性ブルジョワの間-帝国的ネットワークが解明される。横浜の居留地とアジア各地に広がる「ビール国家」と表現される、ドイツ系の人びとが作り上げた外国人クラブが分析され、それが、彼が故郷で属していた学生組織と類似したものであり、ビールの飲酒と合唱を特徴とする特殊なソシアビリテが醸成されていたとされる。リッターがそこに自らのアイデンティを見出し、民族主義的で植民地主義的感性を育んだ様子が描写される。第 4 章では、外交の文化史として、リッターの日本観とアジア観が扱われる。第 5 章では、スイスが好んだビジネスライクな外交スタイルと、日本が好んだヨーロッパ列強の貴族的な外交スタイルが対比的に描かれる。第 6 章では、リッターが、自身が有すると称する日本に関する専門的な知識

を利用して、自分のキャリアに利用しようとした点が明らかにされる。第 7 章では、1909 年にリッターがアメリカ大使に赴任し、第 1 次世界大戦中に事実上解任される時期が、「ビール国家」の崩壊と重ねて論じられる。

結論としては、次のような点が強調されている。リッターは、クラブを中心とするドイツ語話者の社会的ネットワークに依存し、その世界観を受け入れていた。日本を含むアジア人に対する偏見を抱いていたが、日本に対する評価は日露戦争を契機に一変した。彼は本国では近代化を推進する急進的な改革派であったが、その信条はアジアにおける植民地支配とは矛盾せず、近代化を推し進める植民地主義を讃美した。一方、貴族主義的外交が支配する第 1 次大戦前の世界では、スイスの外交官としてのステイタスは低かった。リッターは、日本語も解せず、日本文化への理解も不十分であったが、アメリカでの実績ではなく、日本での功績が現在に至るまで歴史的に評価されるようになった。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、以下のような点で独創性とメリットを有する優れた研究である。

第 1 に日本における主要な欧米列強ではない、「植民地を持たない植民地主義」の実態を詳しく取り上げ、それが日本のみならずアジア各地に広がる、ドイツ語話者が構築した男性のブルジョワ社交クラブのネットワークに連なるものであることを指摘した点が秀逸である。「ビール国家」の表現は、既存のものであるが、それが学生時代における大学文化の共有を基盤として、国境を越えた広がりを持って展開しており、リッターの行動やアイデンティティを大枠で規定していたという指摘は、傾聴に値する。

第 2 に、スイスにおける急進的改革派であったリッターが、その信条に矛盾することなく、植民地主義の信奉者でもあったことを明らかにした点が興味深い。フェミニズムや労働運動など、多くの改革運動と帝国主義の協力関係が指摘されているが、急進的改革派であったリッターが、近代化の推進主体としての帝国主義を評価し、大規模な飢饉による大量の餓死者、抵抗する者の処刑などを是認する姿は適切に表現されている。

第 3 に、リッターの日本観やアジア観が丹念に追及されており、日本語能力や奉公人を除く日本人との接触の欠如の結果として、それが主にドイツ語新聞とドイツ人のクラブの影響によって形成されたことが証明されている点があげられる。また、専門的知識がないにもかかわらず、リッターが本国に向けては、日本や極東の専門家として振舞い、博物館などの美術工芸品の収集を手伝い、一種のポストコロニアリズムとして、現在に至るまで歴史的にその貢献が評価されているというパラドックスの指摘も興味深い。

この他にも、評価すべき事実の発掘が多く見られるが、いくつかの問題点も存在している。例えば、リッターの日本観が否定的なものから肯定的なものへと、日露戦争を契機に突如転換した事実は十分に示されているが、なぜこのような突然の変化が起こったのか、その理由については議論が不十分である。また、文化的な観点と政治経済的な観点の違いについても、もう少し掘り下げた議論があってもよかった。さらに 4 つのアプローチの中の間-帝国史のアプローチに関しては、その意義づけが十分に説得的であるとは言い難い。例えば、「ビール国家」と称されるドイツ語話者のネットワークは、確かに国境を越えて展開しているが、それは従来からある汎ゲルマン主義の枠組みとどう違うのか。それを間-帝国的と理解することで、どのような知見が得られるのか。議論が尽くされているとは言えない。

しかし、そうした残された諸課題のために、本論文の価値が大きく損なわれるものではない。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。